

『太平記』 卷八の構成と展開

谷 垣 伊太雄

八、谷堂炎上事

一

『太平記』^(注1) 卷七は、A「鎌倉幕府の斜陽（北条氏の落日）」と、B「後醍醐天皇の復活」という二本柱のうち、Bに傾斜する形で物語の展開が見られた。その傾向が更に強まるのが卷八である。^(注2)

本稿で取扱う卷八の章立ては次の通りである。

- 一、摩耶合戦事付酒部瀬河合戦事
- 二、三月十二日合戦事
- 三、持明院殿行幸六波羅事
- 四、禁裡仙洞御修法事付山崎合戦事
- 五、山徒寄京都事
- 六、四月三日合戦事付妻鹿孫三郎勇力事
- 七、主上自令修金輪法給事付千種殿京合戦事

第一章は、卷七の後半に記された先帝（後醍醐天皇）の船上山への到着と「船上合戦」における隠岐判官清高の敗退とを受け、「隠岐判官清高合戦ニ打負シ後、近國ノ武士共皆馳參ル由、出雲・伯耆ノ早馬頻並ニ打テ、六波羅へ告タリケレバ、事已ニ珍事ニ及ビヌト聞人色ヲ失ヘリ」という状況が、まず確認される。そして、「佐々木判官時信・常陸前司時知ニ四十八箇所ノ籙、在京人并三井寺法師三百余人ヲ相副テ、以上五千余騎」の摩耶の城への発向が述べられるが、それは「是ニ付テモ、京近キ所ニ敵ノ足ヲタメサセテハ叶マジ。先攝津國摩耶ノ城へ押寄テ、赤松ヲ可退治トテ」（傍点筆者。以下同じ）とあるように、船上山で勝利を収めた「先帝」勢の上京を警戒した六波羅方の先制攻撃である事がわかる。

元弘三年（一三三三）閏二月十一日に、六波羅勢は摩耶城を攻め

る。それに対し、赤松入道円心は「態ト敵ヲ難所ニ帶キ寄ン為」の作戦をとる。その事に気付かぬ「寄手」は、山へ攻め上ったものの「七曲トテ岨ク細キ路」で「少シ上リカネテ支ヘタリケル所」を、赤松則祐らの射撃を受け、「少シ射シラマカサレテ、互ニ人ヲ楯ニ成テ其陰ニカクレント色メケル氣色」を見せたが、そこを赤松範資ら五百余人が「鋒ヲ雙テ大山ノ崩ガ如ク」打って出る。寄手は命令に対しても「耳ニモ不聞入」退却し、深田や次のため「返サントスルモ不叶、防ガントスルモ便リナシ」という有様となり、「僅ニ千騎ニダニモ足ラデ」京都へ引返したため、「京中・六波羅ノ周章不斜」という状況を呈する（傍線筆者。以下同じ）。

右の合戦描写を見ると、敵を誘き寄せるための赤松円心の「遠矢少々射サセテ、城へ引上リケル」という作戦は、巻六の住吉・天王寺合戦における「遠矢少々射捨テ、一戦モセズ天王寺ノ方へ引退ク」楠正成のそれと重なるものである。この〈武略〉に対抗する六波羅勢の方は、「勝ニ乗テ」攻めたにも拘らず、右の各引用文の傍線部分に見られるように、〈負〉の表現（否定的表現）を多用する形で語られる。

「備前國ノ地頭・御家人モ大略敵ニ成ヌト聞ヘケレバ、摩耶城へ勢重ナラヌ前ニ討手ヲ下セトテ、同二十八日、又一萬余騎ノ勢」が六波羅より派遣される。一方、赤松円心は三千余騎を率いて「久々智・酒部」に陣取る。三月十日、六波羅勢が「瀬河」に到着した事を聞いた赤松は「スコシ油斷シテ」「雨ノ晴間ヲ待」っていたところ、船で尼崎に上陸した阿波の小笠原勢三千余騎に攻められ、五十

余騎で大軍の中に駆け入り戦った赤松は「父子六騎」となってしまう。ところが、彼等は「皆揆ヲカナグリ捨テ大勢ノ中へ颯ト交リテ懸マワ」った結果、「敵是ヲ知ラデヤ有ケン、又天運ノ助ケニヤ懸リケン、何レモ無恙シテ」味方の勢の中に逃げ込む事ができたのであった。これも又、巻三において正成達が「皆物ノ具ヲ脱ギ、寄手ニ紛テ」赤坂城を捨てて脱出した姿勢と共通のものであり、その場面では「正成が運ヤ天命ニ叶ケン」とも記されていた。自分の存在に無名性を与える事によって危地を脱出するとともに、その選択が「天運ノ助ケ」を受けたり「天命ニ叶」うものであったと語られる、そのような層に支えられたのが「官軍」であったという事については既述した。^(注3)

こうして「虎口ニ死ヲ遁レ」た赤松達の軍勢は「瀬河ノ宿」に押し寄せ、「其勢三三萬騎モ有ント見ヘ」た六波羅勢を撃破する。そして「手負・生捕ノ頸三百余、宿河原ニ切懸サセテ、又摩耶ノ城へ引返サントシ」たところ、赤松円心の子息則祐が「軍ノ利ハ勝ニ乗テ北ルヲ追ニ不如。今度寄手ノ名字ヲ聞ニ、京都ノ勢數ヲ盡シテ向テ候ナル。此勢共今四五日ハ、長途ノ負軍ニクタビレテ、人馬トモノ物ノ用ニ不_レ可_レ立。臆病神ノ覺ヌ前ニ續ヒテ責ル物ナラバ、ナドカ六波羅ヲ一戦ノ中ニ責落サデハ候ベキ」と主張したため、「逃ル敵ニ追スガウテ」京へと攻め上る。緒戦で「勝ニ乗テ」攻撃し敗退した六波羅勢と、戦況を充分把握した則祐の言葉の中で使われている「勝ニ乗テ」とでは、大きな懸隔のある事がわかる。

る、船で尼崎に上陸した阿波の小笠原勢三千余騎に攻められ、五十

赤松則祐とは対照的に、六波羅方は「斯ル事トハ夢ニモ知ズ。摩耶ノ城ヘハ大勢下シツレバ、敵ヲ責落シ事、日ヲ過サジト、心安ク思ケル。其左右ヲ今ヤ／＼ト待ケル所ニ」味方が「打負テ逃上ル由披露」あった。しかし「實説ハ未聞。何トアル事ヤラン、不審端多キ」という状況だった所へ、「三月十二日申刻計ニ、淀・赤井・山崎・西岡邊三十余箇所ニ」火の手があがり、「西國ノ勢已ニ三方ヨリ寄タリトテ、京中上ヲ下ヘ返シテ騒動」する。「三月十二日合戦」を描いた第二章は、冒頭から六波羅方にとって不利な状況で展開する。

實際、「両六波羅」の召集に対して、「宗徒ノ勢ハ摩耶ノ城ヨリ被ニ追立、右往左往ニ逃隠レ」る有様であったし、「奉行・頭人ナンド被ニ云テ、肥腹レタル者共ガ馬ニ被ニ昇乗テ、四五百騎」参集したものの、「皆只アキレ迷ヘル計ニテ、差タル義勢モ無」いという現実の中で、六波羅北探題・北条仲時自身「坐ナガラ京都ニテ相待シ事ハ、武略ノ足ザルニ似タリ。洛外ニ馳向テ可防」として「隅田・高橋ニ、在京ノ武士ニ萬余騎ヲ相副テ」、「此比南風ニ雪トケテ河水岸ニ余ル時ナレバ」と判断して、桂川を隔てて対陣する作戦をとる。

北条仲時のこの作戦は、六波羅勢の現状を認識した上での措置として現実には叶ったものであった。そのため、上京した赤松勢三千余騎も、対岸の大軍を見て「矢軍」するしか手立てではなかった。しかし、赤松則祐は、父円心の説得にも拘らず、「急ニ戦ヲ不決シテ、敵ニ無勢ノ程ヲ被ニ見透」、雖戦、不可有利」と言い放って自ら

桂川を渡り、飽間・伊東ら五騎も後に続く。この動きを見た六波羅勢は「人馬東西ニ僻易シテ敢テ懸合セントスル者」もなく「楯ノ端シドロニ成テ色メキ渡ル」有様。直ちに赤松範資・貞範ら三千余騎が渡河し、六波羅勢は戦わずに退却する。こうして、六波羅方の守備線は桂川から鴨川まで後退してしまふ。

第三章は、^(注4)京中合戦の前に、光厳天皇をはじめとする持明院統の院・法皇・東宮・皇后・法親王らの六波羅への遷幸を記す。

続いて、六波羅方の軍勢配置の叙述となる。「隅田・高橋ニ三千余騎ヲ相副テ八条口ヘ」「河野九郎左衛門・陶山次郎ニ二千騎ヲサシ副テ、蓮華王院ヘ」派遣する。ところが、陶山は河野に向かつて「何トモナキ取集メ勢ニ交テ軍ヲセバ、怒ニ足纏ニ成テ懸引モ自在ナルマジ」として、「六波羅殿ヨリ被ニ差副タル勢ヲバ、八條川原ニ引ヘサセテ時ノ聲ヲ擧ゲサセ」、自分達は「手勢ヲ引勝テ」攻撃しようとする。河野も賛同し、陶山・河野の四百数十騎は、「敵」を縦横に攪乱する。七条大宮辺で、隅田・高橋勢が高倉・小寺・衣笠勢に攻め立てられているのを見て、河野が援助しようとしたところ、陶山は、隅田・高橋を信用できないとして制止する。暫く「見物」した河野・陶山は、隅田・高橋勢が敗色濃くなったのを見計らって出兵。その奮戦によって、「寄手又此陣ノ軍ニモ打負テ」退却する。

一方、赤松貞範・則祐兄弟は、敵を追ううちに「主従六騎」となる。六条河原へ出て「六波羅の館へ懸入シ」事を狙っていたが、

「東西南北ニ敵ヨリ外ナシ」という状態となったため「サラバ且ク敵ニ紛テヤ御方ヲ待ツ」と、「皆笠符ヲカナグリ捨テ、一所ニ扣へ」て待機。ところが、隅田・高橋が「赤松ガ勢共、尙御方ニ紛テ此中ニ在リト覺ルゾ」と触れて回つたため、六騎で二千騎の中に駆け入り戦う。郎等四騎が討たれ、貞範と逸れた則祐は「只一騎」となり、敵八騎に追われつつも「心閑ニ」落ちて行き、羅城門の辺で貞範と合流。やがて千余騎となったので、再び六波羅勢七千余騎と対決したが、河野・陶山勢五百余騎が背後から攻撃に加わつたため、赤松勢は多数が討たれ、山崎を指して引き返す。

河野・陶山は長追いはせず、鳥羽殿の前から引き返し、「虜二十余人、首七十三取テ、鋒ニ貫テ、朱ニ成テ六波羅へ馳參」る。光厳天皇から「兩人ノ振舞イツモノ事ナレ共、殊更今夜ノ合戦ニ、旁手ヲ下シ命ヲ捨給ハズバ、叶マジトコソ見ヘテ候ツレ」として、「其夜聽テ臨時ノ宣下有テ、河野九郎ヲバ對馬守ニ被成テ御劔ヲ被下、陶山二郎ヲバ備中守ニ被成テ、寮ノ御馬ヲ被下」たので、「或ハ羨ミ或ハ猜デ、其名天下ニ被知」たのであった。翌日、隅田・高橋は「京中ヲ馳廻テ、此彼ノ堀・溝ニ倒レ居タル手負死人ノ頸共ヲ取集テ、六条川原ニ懸並タ」ところ、「八百七十三」あった。これは、功名を主張するため、「軍モセヌ六波羅勢ドモ」が「洛中・邊土ノ在家人ナンドノ頸假首ニシテ、様々ノ名ヲ書付テ出シタル頸共」だった。しかもその中に、「赤松入道圓心ト札ヲ付タル首」が五つもあった。「何レモ見知タル人無レバ、同ジャウニ」懸けたものであったため、これを見た「京童部」は「頸ヲ借タル人、

利子ヲ付テ可返。赤松入道分身シテ、敵ノ盡ヌ相ナルベシ」と、「口々ニコソ笑」った。

第四章冒頭は次のような文章構成になっている。

此比 四海大ニ亂テ、
兵火天ヲ掠メリ。

聖主屢ヲ負テ、春秋無ニ安時、
武臣矛ヲ建テ、旌旗無ニ閑日。

是以法威ニ逆臣ヲ不_レ鎮バ、靜謐其期不_レ可有トテ、諸寺諸社ニ課テ、大法秘法ヲ被修ケル。

(1、梶井宮……宮中において「佛眼ノ法」)

(2、慈什僧正……仙洞において「薬師ノ法」)

(3、武家……山門・南部・園城寺に対して庄園を寄進し、
神宝を献上し、祈禱をした。しかし、

公家ノ政道不正、

武家ノ積惡禍ヲ招キシカバ、

祈共神不_レ享_ニ非礼、

語ヘドモ人不_レ耽_ニ利欲ニヤ、

只日ヲ逐テ、國々ヨリ急ヲ告ル事隙無リケリ。

一方で、合戦を記しつつ、右のような概況分析を付す事によって、今後の展開をも予告する叙述となっている。しかも、続く文は「去三月十二日ノ合戦ニ赤松打負テ、山崎ヲ指テ落行シヲ、頓テ追

けたものであったため、これを見た「京軍部」は「頸ヲ借タル人、

懸テ討手ヲダニ下シタラバ、敵足ヲタムマジカリシヲ、今ハ何事カ可有トテ被_レ油斷_シニ依テ」と、かなりの時間の経過があったかの如き書き方となっている。これは、右の概観・分析・展望の一文を合戦譚の間に置く事を意識するゆえのものと考えられる。又、この引用文傍線部分で作戦ミスを指摘されている対象は、「六波羅」であつて、前章の英雄、河野・陶山ではない。

結局、一旦は敗走した赤松も、大勢の参集を得て「山崎・八幡ニ陣ヲ取、河尻ヲ差塞ギ西國往反ノ道ヲ打止ム」という策をとる。そこで、六波羅の命令を受け「四十八箇所ノ簞、并在京人、其勢五千餘騎」が「三月十五日ノ卯刻ニ」出発する。これに対し、赤松は三千余騎を「一手ニハ足輕ノ射手ヲ勝テ五百餘人小塩山ヘ」「一手ヲバ野伏ニ騎馬ノ兵ヲ少々交テ千餘人、狐河ノ邊ニ」「一手ヲバ混スラ打物ノ衆八百餘騎ヲ汰テ、向日明神ノ後ナル松原ノ陰ニ」と三手に分けて配備する。六波羅勢は「敵此マデ可_レ出合トハ不_レ思寄、ソゾロニ深入シ」「山嶮シテ不_レ上得」「思モヨラス」敵の襲撃を受け、「敵ヲ小勢ト侮テ」攻めると、方々から現れた敵勢の連続攻撃に遭い、京へ引返す。死傷者は少なかったが、汚れた馬・鎧の敗走軍が昼間京中を通つたところ、「見物シケル人」達全員が「哀レ、サリトモ陶山・河野ヲ被_レ向タラバ、是程ニキタナキ負ハセジ物ヲ」として、「笑ハヌ人モナカ」った。この章は、「去バ京勢此度打負テ、向ハデ京ニ被_レ殘タル河野ト陶山ガ手柄ノ程、イトド名高ク成ニケリ」という文で締め括られる。

物語の展開は、第四章冒頭部にも要約する形で呈示されている

が、第一章から第四章までを通観する時、合戦譚叙述の「型」とでも言うべきものを想定しうる。例えば、勝利者側の人物形象については、結果的に常に楠正成が一つの典型として意識され、巻三で正成が主張した「武略ト智謀」が、勝利のための基準として確認される事となる。

又、巻八の京合戦については、六波羅勢の中で、河野・陶山と隅田・高橋とが、〈対〉としての役割を担っている。そのうち、「河野・陶山」組では、主に陶山が発言し、河野が従うという形になっている。第三章で、六波羅から出兵命令を受けた時、まず、陶山は「何トモナキ取集メ勢」たる「六波羅殿ヨリ被_レ差副タル勢」を「時ノ聲ヲ舉サセ」る存在と定め、自分達は「手勢ヲ引勝テ」戦おうと、河野に提案する。そして、河野・陶山勢は、「思モ寄ラヌ後ヨリ、時ヲ咄ト作テ」攻めかけたり、「一所ニ合テハ兩所ニ分レ、兩所ニ分テハ又一所ニ合」いながら戦う。

赤松方の軍勢に押され気味の隅田・高橋を見て、河野が援軍を提案した時、陶山は「隅田・高橋ガ口ノ惡サハ、我高名ニゾ云ハンスラン」と言つて押しとどめ、暫く「見物」した後に「イザヤ今ハ懸合セン」と河野に声をかけ、「一手ニ成テ大勢ノ中ヘ懸入り、時移ルマデ」戦つた。又、一度敗走した赤松勢が集結して千余騎となり、「又時ノ聲ヲ揚タ」時も、「河野ト陶山トガ勢五百余騎」で赤松勢の後陣を打破し、赤松勢を敗走させた。

結局、この合戦の功績によって、河野は対馬守に、陶山は備中守に任命される。ところが、河野・陶山が取つた首「七十三」に対

し、「軍散ジテ翌日」隅田・高橋が「京中ヲ馳廻テ、此彼ノ堀・溝ニ倒レ居タル手負死人ノ頸共ヲ取集」めたが、その数は「八百七十三」であった。「京童部」の嘲笑を待つまでもなく、この数の対比そのものが、隅田・高橋の存在をパロディーの中でクローズアップしている。

巻三の笠置合戦に、六波羅の両検断として「糟谷三郎宗秋・隅田次郎左衛門」が登場した時、「拔懸」して「木津川ノ瀬々ノ岩浪早ケレバ懸テ程ナク落ル高橋」「懸モ得ヌ高橋落テ行水ニ憂名ヲ流ス小早河哉」と歌われたのは、「高橋又四郎」であった。笠置落城後の十月八日の項に両検断として「糟谷三郎宗秋」とともに名前が記されている「高橋刑部左衛門」が、巻八の両検断「隅田・高橋」に該当すると考えられるが、「高橋又四郎」との関連については確認する事ができない。ただ、巻九の、六波羅北探題北条仲時以下「四百三十二人」が、近江の番場で自害した場面でも、高橋姓の者五名（その中に「又四郎」も含まれる）と、隅田姓の者十一名とが連続する形で記されている事から考えて、巻三を出発点とし、巻六の渡部橋合戦で楠正成に負けて「渡部ノ水イカ許早ケレバ高橋落テ隅田流ルラン」と落首に歌われて以来、「隅田・高橋」は、笑われるべき存在として、六波羅滅亡の過程で担わされた道化役を、演じ続けて来たと言えるであろう。

一方、「河野・陶山」の方は、巻三の笠置城陥落の立役者集団「備中国ノ住人陶山藤三義高」「陶山吉次」らと人物像の上で重なるものを感じさせる「陶山」（前述のように、巻八では「陶山二郎」が

「備中守」に任命される）が、河野をリードする形で大活躍を見せる。従って、彼等は、六波羅勢の落日の中にあって、「隅田・高橋」と〈対〉的構成をとりつつ、最後に輝きを見せる英雄的人物像として、「哀レ、サリトモ陶山・河野ヲ被向タラバ、是程ニキタナキ負ハセマジキ物ヲ」と、まさに語られ続けた、と言えよう。

二

第五章。元弘三年三月二十六日、大塔宮の牒状を受けた山門の衆徒は、「武家追討ノ企」に賛同の決議をする。二十七日に日吉の大宮前に集結した数は「十萬六千餘騎」であった。ただ、「大衆ノ習、大早無極所存ナレバ、此勢京ヘ寄タランニ、六波羅ヨモ一タマリモタマラジ、聞落ニゾセンズラント思侮テ、八幡・山崎ノ御方ニモ不_レ牒合_ニシテ」「物具ヲモセズ、兵糧ヲモ未ダツカハデ」出発する。

一方、六波羅方は、山門側の動きを知った上で「山徒縦雖ニ大勢、騎馬ノ兵一人モ不可_レ有。此方ニハ馬上ノ射手ヲ撰ヘテ、三條河原ニ待受ケサセテ、懸開懸合セ、弓手・妻手ニ着テ追物射ニ射タランズルニ、山徒心ハ雖_ニ武、歩立ニ力疲レ、重鎧ニ肩ヲ被引、片時ガ間ニ疲ルベシ。是以小碎大、以弱拉剛行也」として、「七千餘騎ヲ七手二分テ」待機する。山門大衆の方は「斯ルベシトハ思モヨラズ、我前ニ京ヘ入テヨカランズル宿ヲモ取、財寶ヲモ管領セン」と押し寄せる。しかし、「兼テヨリ巧ミタル」六波羅方に、攪乱・圧倒され、たちまち山上へ引返す。

のを感じさせる「陶山」(前述のように、巻八では「陶山二郎」が

庄倒され、たちまち山上へ引返す。

■その中で、「豪鑿・豪仙」という「三塔名譽ノ惡僧」のみは、「山門ノ恥辱天下ノ嘲哂」と考え、奮戦したが「半時許支ヘテ戦ケレ共、續ク大衆一人モナシ」という状況のもとで自害を遂げる。この二人の活躍については「是ヲ見ル武士共、「アハレ日本一ノ剛ノ者共哉」ト、惜マヌ人モ無リケリ。前陣ノ軍破レテ引返シケレバ、後陣の大勢ハ軍場ヲダニ不見シテ、道ヨリ山門ヘ引返ス。只豪鑿・豪仙二人ガ振舞ニコソ、山門ノ名ヲバ揚タリケレ」と贊美される。結局、大軍を動員しながらも、統率力・作戦力が欠如する山門大衆の敗退は、右の傍線部分の否定的表現からも予見しうるものである。

第六章は、更に現実的な姿を露呈する山門衆徒についての記述から始まる。つまり、呆気なく退却したとは言うものの「十萬六千餘騎」の動員力を持つ山門は、六波羅にとっては無視できぬ存在であり、そのため、六波羅は「衆徒ノ心ヲ取ラン為ニ」「大庄十三箇所」を「山門ヘ寄進」し、「宗徒ノ衆徒ニ、便宜ノ地ヲ一二箇所充祈禱ノ為トテ恩賞」を施行した。すると「山門ノ衆議心心ニ成テ武家ニ心ヲ寄スル衆徒モ多ク出来」た。そのため、「八幡・山崎ノ官軍」は、「其勢大半減ジテ今ハ僅ニ一萬騎ニ足ラザリ」という数になっ

てしまう。
やがて、四月三日、官軍は七千余騎を二手に分けて京都へ攻め寄せ。六波羅方は「度々ノ合戦ニ打勝テ兵皆氣ヲ擧ケル上、其勢ヲ算フルニ、三萬騎ニ餘リケル間、敵已ニ近付ヌト告ケレ共、仰天ノ

氣色モナ」く、「六條河原ニ勢汰シテ閑ニ二分」をして待つ。その中には、山門大衆について「山門今ハ武家ニ志ヲ通ズトイヘドモ、又如何ナル野心ヲカ存ズラン。非可^レ油斷^ニトテ」佐々木時信ら三千余騎を配備した、との記述も含まれていた。多少の誇張があるにせよ、このように語られる所に、山門大衆の現実があつた事は確かであろう。

さて、その四月三日の緒戦は「去月十二日ノ合戦モ、其方ヨリ勝タリシカバ吉例也トテ、河野ト陶山トニ五千騎ヲ相副テ法性寺大路ヘ被^レ差向」と、河野・陶山に注目する形で叙述される。河野・陶山の三百余騎の活躍によって、嶋津・小早河の場合は「己ガ陣ノ敵ヲ河野ト陶山トニ被^レ拂テ、身方ノ負ヲシツル事ヨト無念ニ思」い、別の敵との「花ヤカナル一軍」を求めて、西朱雀へ移動して行く。ただ、以後の場面には、河野・陶山は登場しない。

次の場面には、赤松方の備中国の四勇士が登場。「長七尺許ナル男ノ、髭兩方ヘ生ヒ分テ、皆逆ニ裂タルガ、鎌ノ上ニ鎧ヲ重テ着、大立舉ノ臍當ニ膝鎧懸テ、龍頭ノ胃猪頸ニ着成シ、五尺餘リノ太刀ヲ帶キ、八尺餘ノカナサイ棒ノ八角ナルヲ、手本ニ尺許圓メテ、誠ニ輕ゲニ提ゲ」た様子は、六波羅勢をして、「未戦先ニ三方ヘ分レテ引退」させるものであった。この頓宮父子・田中兄弟の四人は、「我等父子兄弟、少年ノ昔ヨリ勅勘武敵ノ身ト成リシ間、山賊ヲ業トシテ一生ヲ樂メリ。然ニ今幸ニ此亂出来シテ、忝クモ萬乗ノ君ノ御方ニ參ズ」と名乗る。ここにも、巻七における「野伏」等とともに、^(注5)「官軍」に参加する層の幅の広さが窺える。

田中兄弟・頼宮父子と嶋津父子三人との対決は、「前代未聞ノ見物」であつたが、小早河が嶋津に援軍を出したのに対して、「田中が後ナル勢、バツト引退」く情勢の中で、四人は「鎧ノ透肉内胃ニ、各矢三十筋被_レ射立テ、太刀ヲ逆ニツキテ、皆立ズクミニ」戦死する。この四勇士については「見ル人聞ク人、後マデモ惜マヌ者ハ無リケリ」と記される。

その後、美作国の菅家の一族、有元三兄弟をはじめとして、福光・殖月・原田・鷹取ら官軍の二十七人が「一所ニテ皆討レ」た中であつて、「播磨國ノ住人妻鹿孫三郎長宗」は、一族十七人が討たれた後、ただ一騎になったものの、追い懸けて来た「印具駿河守ノ勢五十餘騎」の中の「年ノ程二十許ナル若武者」の「鎧総角ヲ擲デ中ニ提ゲ、馬ノ上三町許」進んでから、「右ノ手ニ取渡シテ、エイト抛タ」ところ、「跡ナル馬武者六騎ガ上ヲ投越シテ、深田ノ泥ノ中ヘ見ヘヌ程」に打ち込んだという活劇譚が続く。以上の人名が出て来る話を「各論」とすれば、「総論」に相当する「赤松入道ハ、殊更今日ノ軍ニ、憑切タル一族ノ兵共モ、所々ニテ八百餘騎被_レ打ケレバ、氣疲力落ハテ、八幡・山崎ヘ又引返シケリ」という末文は誠に簡単なものである。

なお、「只一騎」となった時、妻鹿孫三郎がつぶやいた独白「生テ無_レ甲斐ニ命ナレドモ、君ノ御大事はニ限ルマジ。一人ナリトモ生殘テ、後ノ御用ニコソ立メ」は、巻三で醍醐天皇に対面した時の楠正成の「正成一人未ダ生テ有_レト被_レ聞召候ハバ、聖運遂ニ可_レ被_レ開ト被_レ思食候ヘ」という言葉と重なるものである。

第七章では、「船上ノ皇居」で「主上」^(注)が自ら「金輪ノ法」を行なつたところ「其七箇日ニ當リケル夜、三光天子光ヲ並テ壇上ニ現ジ」たので「御願忽ニ成就シヌト、憑敷被_レ思召」た事が短く記される。そして、「ヤガテ大將ヲ差上セテ赤松入道ニ力ヲ合セ、六波羅ヲ可_レ攻」と千種忠顕以下の勢を派遣する。伯耆国を出立した時「僅ニ千餘騎」だった軍勢は、各国からの勢が加わつて「程ナク二十萬七千餘騎」になった。更に、但馬国に配流となつていた「第六ノ若宮」を「上將軍ト仰ギ奉テ、軍勢催促ノ令旨ヲ被_レ成下」た。

殿法印良忠が八幡、赤松入道円心が山崎、そして、宮と千種忠顕が西山の峯堂に陣取つた。ところが、赤松の陣と「千種殿ノ陣ト相去事僅ニ五十余町ガ程」だったので「方々牒ジ合セテコソ京都ヘハ可_レ被_レ寄カリシ」だったのに、千種忠顕は「我勢ノ多ヲ被_レ憑ケン。又獨高名ニセントヤ被_レ思ケン、潛ニ日ヲ定テ四月八日ノ卯刻ニ六波羅ヘ」出兵。すでに、ここで千種忠顕の作戦ミスが指摘されるときともに、四月八日の出兵についても、「佛生日」に合戦を始めた点について、「天魔波旬ノ道ヲ學バル條難ニ心得」として「人々舌ヲ翻セリ」という批判的言辭で記述される。

実戦場面では、例えば、名和小次郎・小嶋備後三郎（児島高德）が対決する。「防ハ陶山ト河野ニテ、責ハ名和ト小嶋ト也。小島ト河野トハ一族ニテ、名和ト陶山トハ知人也。日比ノ詞ヲヤ恥タリケン、後日ノ難ヲヤ思ケン、死テハ戸ヲ曝トモ、逃テ名ヲバ失ジト、互ニ命ヲ不_レ惜、ヲメキ叫デシ戦ヒケル」と、〈対〉の構成のもとに

開ト被^レ思食^レ候へ」という言葉と重なるものである。

〈対〉的表現で描かれる。しかし、小嶋・名和が大将から呼び返されたため、彼等が「陶山ト河野トニ向テ、「今日已ニ日暮候え。後日ニコソ又見參ニ入ラメ」ト色代シテ、兩陣トモニ引分、各東西へ去」ったという風に締め括られる。英雄的人物同志の対決を避けようとする『太平記』の作品構築のあり方を見る事ができる。^(注8)

味方の劣勢を目のあたりにした千種は、小嶋に向かつて、「都近キ陣ハ悪カリヌト覺レバ、少シ堺ヲ阻テ陣ヲ取り、重テ近國ノ勢ヲ集テ、又京都ヲ責バヤ」と言う。小嶋は「軍ノ勝負ハ時ノ運ニヨル事」を認めた上で「只引マジキ處ヲ引カセ、可懸所ヲ不懸ヲ、大將ノ不覺トハ申也」と述べ、赤松の奮戦を強調し、撤退に反対する。ところが、小嶋が三百余騎で「七条ノ橋ヨリ西ニ」陣取ったのに対し、小嶋から指図されて「暫ハ峯ノ堂ニ」いた千種は、小嶋が言った「敵若夜討ニヤ寄ンズラン」という言葉に恐怖心を掻き立てられ、「弥臆病心ヤ付給ヒケン」夜半過ぎに八幡をさして落ちて行く。

小嶋は、峯の堂の篝火が消えてゆくのを不審に思い「是ハアハレ大將ノ落給ヒヌルヤラント怪テ」峯の堂へ登って行く。途中で出会った荻野彦六朝忠から、「大將」がすでに撤退したと聞かされ「大ニ怒テ」「カ、ル臆病ノ人ヲ大將ト憑ミケルコソ越度ナレ」と言つて、「宮ノ御跡ヲ奉^レ見テ追付可^レ申」として、唯一人で峯の堂に向かう。そして、「錦ノ御旗、鎧直垂マデ被^レ捨」ているのを見た小嶋は、「アハレ此大將、如何ナル堀ガケヘモ落入テ死ニ給ヘカシ」と暫く「堂ノ縁ニ齒嚙シテ立」った後、「錦ノ御旗」のみを下人に持

互ニ命ヲ惜、ヲメキ叫デゾ戦ヒケル」と、〈対〉的構成のもとに

たせ、荻野に追い付く。

赤松達の奮戦を勝利に結びつけるための役割を担って派遣された「大將」としての千種忠顕が、一貫して否定的に描かれるこの章は、やがて京都へ還幸するはずの後醍醐天皇陣営に内在する問題点という形で、今後の物語の展開にさまざまな意味を投げかけている。

「千種頭中將」の西山の陣からの撤退の翌日四月九日、六波羅勢は「谷ノ堂・峯ノ堂已下淨住寺・松ノ尾・萬石大路・葉室・衣笠ニ亂入テ、佛閣神殿ヲ打破リ、僧坊民屋ヲ追捕シ、財寶ヲ悉ク運取テ後、在家ニ火ヲ放った。そのため「堂舎三百餘箇所、在家五千餘宇」は「一時ニ灰燼ト成」ってしまった。

短い第八章では、六波羅勢の暴挙が記される。千種忠顕を批判的に描いた前章から見れば、六波羅方の圧倒的勝利が語られるであろうと思われる第八章が、予想される文脈とは異なる展開を見せることになる。しかし、第八章の五分の三を「谷堂」と「浄土寺」の縁起とし、「カ、ル異瑞奇特ノ大伽藍ヲ無咎シテ被^(注9)滅ケルハ、偏ニ武運ノ可^(注10)盡前表哉ト、人皆唇ヲ翻ケルガ、果シテ幾程モ非ザルニ、六波羅皆番馬ニテ亡ビ、一類悉ク鎌倉ニテ失セケル事コソ不思議ナレ。「積惡ノ家ニハ必有^(注11)餘殃」トハ、加様ノ事ヲゾ可^(注12)申ト、思ハヌ人モ無リケリ」との末文で完結させる事を考える時、本稿の冒頭で述べたA「鎌倉幕府の斜陽」とB「後醍醐天皇の復活」とのうち、右の引用文のうち「一類悉ク」以下の文章のない古態本系では、まず、六波羅の滅亡を、流布本系では更に鎌倉幕府の滅亡をも

合わせて、それぞれ語っている事がわかる。

しかも、「武運」が尽きた結果としての六波羅の滅亡は、「前表」としての暴挙によって予見されるものとされている。そして、やがて巻九で展開される六波羅の最期が、官軍に敗北したためではなく「異瑞奇特ノ大伽藍ヲ無咎シテ」炎上させた罪による、という風に論理的結接をはかる所に、〈作者〉の姿勢をも見る事ができる。^(注U)なお、人名を点綴しつつ、勝利者・敗北者を具体的に描いて来た合戦譚が、第八章では「京中ノ軍勢」という個人名を消した表現によって叙述されている事にも注目して良からう。英雄的人物像を詳しく描いていくクロースアップの場面と、〈個〉を消してしまう形で、歴史の展開を概観し展望する場面とを組み合わせる形で、『太平記』の軍記物語としての表現は達成されていると言えよう。

注

(1) 拙稿『『太平記』巻七の構成と展開』(『樟蔭国文学』27号)参照。

(2) 引用は日本古典文学大系本(岩波書店)による。

(3) 注(1)の拙稿及び拙著『太平記の説話文学的研究』第二章参照。

(4) 神田本・西源院本・玄玖本では第二章に含まれている。流布本の章段名は内容の一部の題名でしかない。

(5) 注(1)の拙稿参照。

(6) 巻七「船上臨幸事」を境に「先帝」から「主上」へと呼称

の変化が見られる事については、大森北義氏が『『太平記』の構想と方法』第一章において詳しく論じておられる。

(7) 巻四で「第四ノ宮ハ但馬國ヘ流奉テ、其國ノ守護大田判官ニ預ラル」と記された聖護院静尊法親王か。

(8) たとえば、巻三においても楠と陶山との対決はなかった。

注3の拙著参照

(9) 「果シテ」という語の分析は、大森氏の著書第三章参照。

(10) 西源院本の場合「果シテ幾程モアラサルニ、兩六波羅都ヲ責落サレテ、近江國番場ニテ亡ニケリ」で終わる。神田本・玄玖本もほぼ同文。

(11) この「谷堂炎上」は、『平家物語(寛一本)』巻五で南都を焼き討ちした平重衡が、巻十で都を引き回されるのを見た「京中の人々」が「是は南都をほろぼし給へる伽藍の罰にこそ」と評した叙法と重なる章段でもある。